
ULTEMAーアルテマー

カタストロフィ = P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ULTIMATEリアルテマ―

【Nコード】

N5514T

【作者名】

カタストロフィ=P

【あらすじ】

魔法が生きる世界。魔導師レイは、王イサキに頼まれ 神の塔と呼ばれる古い遺跡に向かう。そしてそれを機に大きな騒動に巻き込まれていくレイとその仲間たち。

行く手の邪魔をする謎の組織・??機関。
記憶を失った謎の少年。

次元の魔女と呼ばれる謎の女性。

全ては最初から決まっていた。

この世に偶然はない。あるのはヒツゼンだけ…。

第1巻 『剣 魔法』

魔法が支配するこの時代……この世界。

剣の時代は終わり、魔法が支配する時代となった。

この世界は海に浮かんだ六つの大きな大陸、数えきれない小さな島々で成り立っている。大陸それぞれが一つの大きな国であり、それから六つの国がこの世界を統治している……そんな世界。

国の中心である指導者が各々の国をまとめ、秩序を守り、束ねる。

六つの国の六人の指導者たち、それを六王と呼んでいる。

そんな国の一つ、ルーマキアはイサキという年老いた男が指導者として国を治める。

指導者……つまり国の代表者となった者はその証として国の名を……ここではルーマキアの名を与えられる。

『イサキⅡグランロードⅡルーマキア』。それが、彼の名前。

だがこの物語の始まりは別の人物から始まる。

ここはルーマキアの中でも中心……国の様々な機関が集まるいわば、王都と呼ばれる都市・イザベル。

六王の一人イサキがいる王宮もこのイザベルにあり、商業も発展し

ている。まさに、中心都市だ。

そのイザベルには王立魔導図書館という建物がある。そこは古今東西ありとあらゆる魔術に関する書物が保管されている巨大な図書館だった。魔法を学ぶ学生から、お偉いさんまで様々な種類の人間がここを利用している。

春夏秋冬、四季折々の環境が目まぐるしく回るルーマキアだが今の季節は冬。雪が深々と降っている。徐々に積もっていく白い粉を図書館の一室から眺めている一人の若者がいた。

「おっ！寒いと思ったら雪が降っていたのか。いやだな…」

雪が降ることを不満そうにする彼の名は『レイ＝アーノルド』。この図書館の管理者である。

「「主様お疲れ〜？」」

そう言つてレイに二人の少女がパタパタと近づいてきた。一人は淡い桃色の髪が肩に届くか届かないかの長さで切りそろえられている。もう一人は全く対照的だ。髪色は薄水色だし二つに束ねた髪は床を引きずるくらいに長い。

「マル、モロ。外を見てごらん？」

マルモ口と呼ばれたその少女たちは言われるまま窓から外を覗きこんだ。

「わあ雪だ！きれい！」「雪きれい！」

「これは今夜はかなり冷えるだろうな…。すこし早いけど、今日はもう閉館するかな・・・」

この国の雪は、油断をするととんでもない目にあうのだ。ドアが凍って閉じ込められる、鼻水が凍る、バナナで釘が打てる……

北国で起こりうることを想定していただければお分かりだろう。

そう、洒落にならないのだ。

「二人とも。エントランスの鍵を閉めてきてくれる？」

は「い、と息もピッタリにマルとモ口は部屋を出て行った。

この二人はレイの子供……。では無い。レイの手伝いをする、召喚獣といわれる魔界の住人だ。

《人にあらずして人より尊き存在》

古い歴史を紐解けば、そこには必ず召喚獣の名が記載されている。魔界と呼ばれる、人間が住む人間界とは異なつた世界が召喚獣の故郷だ。はるか太古の昔から、人間と召喚獣は互いに干渉しあつて生きてきた。かつて人間と召喚獣は今のようには別世界ではなく、同じ世界を共有し暮らしていた。という記載もある。

召喚獣を人間界に喚びだしその神聖なる力を借りることを、召喚魔

法と呼ぶ。これを成し遂げるには、召喚獣の棲む魔界から人間界へと連れてくるための通路である扉を創造し、またそれを開かなければならない。

これだけでも血の滲むような努力　さらに膨大な魔力を消費する上にそもそもこの魔術には対象となる召喚獣と術者との間に契約が必要となる。術者側・喚びだす側がどんなに望んでも、召喚獣がその術者を、自らを使役するのに相応しい者であると判断しなければ契約は結ばれない。召喚魔法は完成しないのだ。

『召喚獣を呼び出している間、新たに別の召喚獣をこちら側に呼び出すことはできない。』という、魔導師たちにとっては言わずとも知れたルールというか、常識がある。呼び出すことを許可しない、のではなく先に述べたようにこの魔術には多くの魔力を費やすため、術者の体を持たないのだ。魔力の消費は、肉体疲労と同じで時間がかかるが、自然回復が可能だ。だがしかし、体内の魔力を空にするとは、己の生命力を使い切ると同義なのだ。召喚獣を呼び出したが、魔力の維持ができずに命を落としていった魔導師など数え切れない位いる。

その場合、呼び出されたモノたちはどうなるのか？

先にも述べたが、異界の者達（召喚獣）は、原則魔導師側が通り道を用意しないとこちらの世界に来ることはできない。

還るのもそのゲートを通らねばならないのはおそらくお分かりだろう。そして、ゲートの創造開錠には呼び出した魔導師の力が必要・・・。

つまり、還れなくなるのだ。元の世界に戻れなくなってしまふ。還れなくなつて、こちら側の世界に閉じ込められてしまつてもしばらくの間は問題ない。だがそれも、召喚獣が持つている魔力の蓄え次第だ。そもそも住む世界が違う彼らは、いるだけで魔力を消費されていく。何をするでもなく、ただ存在^いするだけで命を削られていくのだ。そうしてやがて、その魔力が底を尽きたとき、召喚獣もまた、消滅する。

契約者によつては、己の命に関わるのだから召喚獣たちはそう簡単に魔導師と契約を交わさない。

召喚魔法を使える者多くいない訳がこれでお分かりだろうか？

このマルとモロも、そういった「還れなくなった」モノの内の二人だ。

二対一体の召喚獣であるこの二人は、主を亡くし、彷徨つていたところをレイに拾われた。だがマル・モロは少し特別な召喚獣で、人間と同じように生活（食事・睡眠）をすれば存在するのに必要最低限の魔力を維持することができるため、今もこうして在り続けることができる。レイはあくまで保護者的立場だ。

現在二人はレイの保護観察のもと、一緒に生活し、レイの仕事を手伝っている。さながら彼にとっては双子の妹のような感じだ。

ふと、エントランスへ降りて行つた、マルとモロの声がかすかに聞

こえた。よく聞いてみると、誰かとしやべっている・・・？
気になったレイは部屋を出て一階のエントランスへ向かった。

エントランスへは、大きな階段一本で繋がっている。さっきいた部屋から出てすぐ目の前の階段を下りれば、そこはエントランスだ。
巨大な木製の扉の前で、長身の男と会話をしているのが目に入った。

「どうしたんだ？お客さん??」

レイの声に振り返ったマルとモロはピョンピョンと飛び跳ねながら
レイに飛びついた。

「ユウが来たの！」 「ユウが来たの！」

ユウ

と呼ばれたその男は、背が高く、肉付きの良い締まった体をしてい
た。腰には刀を差して 赤みがかった短髪をツンツンに立てていた。

「よお、レイ！」

ニカツと笑うと頬にえくぼが現れる。レイとユウは古くからの知り
合いで、たまにこうして通いネコのようにふらっとやってきては、
タダ飯にありつこうとするユウをレイは「狩りをしない雄ライオン」
と称する。

「毎度毎度、何の連絡もなくやってくるよな。お前は。」

迷惑そうな顔をするレイ。

「お前…それが親友に対する態度かよ。冷たい野郎だなあ…なあ？」

そう言っつて、レイの周りをくるくるランデヴーしている二人の少女たちに同意を求めたが……

「仕方ないよ。ユウだもん。」
「だってユウは何もしないダメ人間だもん。」

「「ねーーーーー!!!!!!」」

「ちょっと待て、何もしないってなんだ!?俺をニートみたいに言うな!!」

「でも実際、そうじゃないか。働かずに毎日毎日修行とか言っつてぶらぶらつろついで。」

「それじゃただの浮浪者だろ!!」

当たりが静まり返った。

「えっ…?」

「違うの……?」

「お前ら……何で今日そんなに俺に冷たいんだよ!!俺何か悪いことしたかっ!？」

「はは、ごめんごめん。つい楽しくなっちゃって…」

「拗ねないで?ユウ。」「ごめんね、ユウ?」

「ケツ……いいいいよ……どーせ俺は働いてませんよー。イサキ様から貰った仕事をやる男ですよー!。」

そういつて懐から紐で縛られた紙の巻物を取り出し、レイたちの前でひらひらと手を振った。その紙を見た途端、レイの目の色が変わった。

「イサキ様からか…?」

「ああ……。……お城へお呼び出しだぜ、お前と俺の二人がな。」

イサキはルーマキアで一番力をもっている魔導師だと、言われている。

今でこそ白髪・白髭の気さくな老人だが、若いころはそれはそれは相当な男前だったらしい。魔法の腕も確かで、彼も召喚魔法を使

う。彼の武勇伝は様々なものがほぼ伝説と化して今でも語り継がれている。

レイ達のいた所から、イサキの待つ場所までは歩いても行けるが、普通はもっぱら馬車が主流だ。

レイとユウも、例によって馬車で向かっている。ユウから受け取った手紙に、レイは目を通す。

「………………。なるほどね。」

「詳しいことは書かれてないけど、ちょっと厄介なことになってるみたいだ。 神の塔 関連だし…。」

「神の塔はまだまだまだまだ謎だからね…。」

神の塔 ……………

かつて、この世界に神が存在したという遙か太古の時代に創建されたと言われる、古い遺跡のことを言う。

塔、と名が付くからには、空に向かって垂直に伸びる縦長の建築物があるのだが、途中で破壊されていて、それが一体どれほどの高さで、頂上には何があったのかも分からない。神の塔に関しては、どんなに古い文献を調べても、詳しいことがほとんど記載されていないのだ。

しかも、神の塔が建っているのは絶海のど真ん中。船で、海から行くものなら何日かかるかもわからないくらい大陸から離れているため、移動手段は空から…

飛空艇を使うのが一番早い。

周りに、高度に発達した島などもない。そんななかで、一体どのような技術を駆使して建造したのか、見当もつかない。

『神が墮とした天空の大聖堂』

そう、呼ばれている。

今でも調査が進められている真つ最中で、各国から…当然レイたち
のいるルーマキアからも優秀な研究チームが派遣されている。

「…そういえば、俺も未確認だけど、アルファム国で神の塔とは別
の、古い遺跡みたいなものが見つかったらしいぜ。」

アルファム国とは、ルーマキアとは海を挟んで隣にある国のことで、
年中雪が降りしきっている雪国だ。この世界は、国が違うだけで生
活環境が全く変わってしまう。環境が変われば文化も変わる。六つ
の国は、それぞれが独自の進化を遂げたといっても過言ではないだ
ろう。

「遺跡？」

「なんでも、強い力が眠っているとかなんとか…。まあ、よくある
話だけだな。最近輸送船がなかなか来ないから情報が入って来づら
いんだと。」

各国同士は、定期的に国交するための超大型輸送船を通わせている
のだが、これは貿易船も兼ねている。各国の特産品や、手紙など生
活に大きく関与する物を数多く乗せているこれが、どうも最近周り
が悪いのだ。

普通であれば、荷物を積んだ輸送船が新たな物を積んで再び戻ってくるのに1週間もかからない。ところが近頃は2週以上かかったりするときがある。船に乗せる積み荷がなかなか集まらないのだ、と戻ってきた船の乗組員は言っているらしい。

「近々、様子を見にうちからも何人が送るってイサキ様が言ってたぜ。」

「神の塔に、見つかった遺跡……忙しくなること必至か……。」

次から次へとすることが増えていくな、と二人は口にすらしなかったが同じことを心の中で思った。

そうこうしているうちに、レイとユウを乗せた馬車は目的地に近づいて来た。

決して抜群の乗り心地ではないが、それなりに快適な馬車の短時間旅行は窓から見える風景が停止したと同時に、終わりを告げた。

馬車は大きな門の前に止まっていた。

何かの模様だろうか？線やら円やらが巨大な図形となって門に描かれている。ここが、このルーマキア・イザベルの中心地……六王イサキが待つ『ヴァリアー城』だ。ここには、国の行政機関や、様々な研究が行われている魔導研究所：通称 魔研、さらに魔導師としての頂点を志す者たちの集う魔術学校も設置されている。

「さあて。参りますが、イサキ様のところへ。」

ユウは首を捻りながら言った。標準サイズのレイはなんら問題は無いが、ガタイがよくレイよりも背が高いユウには馬車は狭すぎたら

しい。

城の中に入るんだから、きちつとしろ とレイが諫める。
姿勢と服装を正して、二人は開かれた門の先へ歩を進めていった。

第1巻 『剣 魔法』 (後書き)

呼んでいただいております。

不定期ですが、2、3週間に一話を目安に頑張ろうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5514t/>

ULTEMAーアルテマー

2011年10月5日14時25分発行